アイス

魔桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アイス

【Ｎコード】
Ｎ４１４７Ｚ

【作者名】
魔桜

【あらすじ】
主人公である雛原詩織は同じ家に住んでいる黒葛陸に好意を抱いていたが、のっぴきならない事情からその想いを伝えることができなかった。それによって起こる様々な問題にぶつかり、主人公が成長していく物語。

雛原詩織視点（1）（前書き）

少々、官能的な表現があり、また全体的に暗い内容となっているので、それらが苦手な方は読まないほうが無難です。

雛原詩織視点（1）

1

木製のドアの前で私は立ち尽くす。
意を決してノックしようとするが、何故か見えない壁に阻まれる。もう一度挑戦する前にゆっくりと木目を指でなぞる。この通り、ちゃんとドアに触れることはできる。できるのだが、どうしても部屋の中の人物を起こすことができない。
制服のスカートをぎゅっと両手で掴む。
どうしよう。せっかく早起きできたというのに、これじゃあまた昨日と同じように遅刻ギリギリの時間になってしまう。
そんなことになったらまた先生に怒られる。ただでさえあの担任教師は怒りやすいので有名なのに。
夏は終わったというのに、手から嫌な汗がじわりで出てくる。
どれだけ時間が経とうが、慣れないものはしょうがない。彼を起こそうとするとどうしても緊張してしまう。
いつもならば私の役目じゃないからやらないで済むのだが、昨日や今日みたいにたまにやらなければならない時がある。
彼と話すのが不愉快というわけではないのだが、相手が相手なのでどうしてもノックを躊躇ってしまっているのだろうか。
こうして彼のことを意識していると、途端に動悸が激しくなる。あまりにプレッシャーがかかりすぎて過呼吸になりそうになる。落ち着く為に深い深呼吸を数回やる。
よし、と握りこぶしで奮起し、再度挑戦しようとするうるがやはり駄目だった。
眼前のドアと私の右手はS極とS極の磁石のように接することができない。

――このままではおそらく一生。
まったく、どうしてこんなに私が焦らないといけないんだろう。
八つ当たりだというのは百も承知だがこれだけ私が失敗を重ねてしまうと、彼が自発的に起床してこないことが駄目だという発想になってしまう。
これだけやっても起こせないのなら、とにかく下に降りて朝食を食べないと。
私は溜め息を零しながら踵を返す。
すると、決してわざとでないが左手がドアにこつんと当たってしまう。
予期せぬ事態に全身から汗がどっと出る。
部屋の中から気だるげな呻き声と何かモノが落ちる音が聞こえる。どうやら彼もようやく起きてくれたらしい。当初の目的を果たしたことになったのだが、私にも心の準備というものがある。
だけどこうも不測の事態が降りかかってきてしまうと対処のしようがない。
逃げてしまおうか、それともあえて堂々と部屋に入ってしまえばいいのかを逡巡する。どっちを選択するにしろ早く行動しなければまた遅刻してしまう。
焦りすぎて私が右往左往しているとドア越しに声を掛けられる。
「……今、何時？」
私の肩がびくりと跳ねる。
欠伸交じりだけれどもようやく彼も少しは覚醒したようだ。相も変わらずの不機嫌そうな声音だ。
それはいつものことなのであまり気にはならない、と強がってみるけど本当は凄く気にしてしまう。相手が私のことをどう思っているかを考えてしまう。
私には一生分かることがないことを考えること事態、人生においては無駄以外の何物でもないことだとは自覚しているがどうしても考えてしまう。

「八時五分前です。今日の朝食は母と一緒に作りました。できれば冷めないうちに早く起きて食べてください」
母と一緒に、というのを協調する。
平日の朝飯は毎回母が作っているだけなのだが、特別に今日だけは朝飯を一緒に作った。
私だって休日ぐらいはたまに作ったりするが平日に作るのは初めてだ。
母は目をぱちくりしていたが、私が朝飯を作る意図を話すと妙に納得していた。
あの笑みには少し癇に障ったけれど、忙しい中手伝ってくれたのだけは感謝しないといけない。今度お礼にマッサジーでもしてあげようかな。
「……うっ」
突然眠気が襲い、出そうになった欠伸を押し殺す。
私も彼同様そこまで朝に強いわけではないので、早起きする為にわざわざ携帯の目覚まし機能を使ったのだが、その効果はてき面だった。
私は三回目のアラームでなんとか起きることに成功できた。普段二度寝、三度寝を繰り返し、親に起こされるまで布団にへばりついて離れない私にしてはよくやったと誰かに褒めてもらいたいぐらいだ。
それにしても大音量で三回もアラームが鳴ったのに全く起きる気配がなかった彼の睡眠に対する執着心に驚嘆する。
「分かった。すぐにそっちに行く」
ドア越しになにやらがさごそと音がする。多分制服に着替えている音だ。平日朝の食卓に出る時はいつも制服姿なのでそのくらいは予想できる。
私たちが通っている男子の制服は地味でありきたりな制服なので他校からはあまり人気はないのだが、女子の制服は人気が高い。
特に合い服が一番可愛いといわれていて、襟がしゅっと引き締ま

るように細くなっている白ブラウスの上からは、ベージュ色のベストを着用する。そしてスカートは赤と黒のチェック柄で可愛くて目立つ上下の組み合わせで、その制服が目当てで通う生徒もいる。
かくゆう私もその中の一人だ。私がこの高校を選んだ理由は自分の家から一番近い高校だったということもある。
だけど今自分の着ている制服に憧れを持っていたからという理由も小さくはない。
「何？　他にも何か用？」
ドアの前に直立したままでいる私の気配に気づいたのか、ドア越しに苛立たしげな彼の声を投げ掛けられる。
「す、すいません！　すぅッ！――」
直ぐに下に降ります。と、言葉を続けられることは出来なかった。謝罪の直後に思いっきりドアに頭をぶつけてしまった。しかも思いのほか勢いがついていたので、少しばかり涙目だ。
意地で苦痛の悲鳴だけは上げなかったが、ほとほと自分のアホサ加減に嫌気が差す。
自分が失敗してしまうところを、いつもこうやって一番見られたくない人に見られてしまう。いや、今日はドアがあるので、失敗してしまった瞬間を見られずに済んだから、まだ良かったと思うべきだろうか。
「お前、何やってるんだ？」
心配というよりは呆れきっている声にさらに落ち込む。私はひりひりする額を抑える。
「な、何でもありません」
とにかくこれ以上彼に醜態を曝す前にここを離れたい。私は失敗を挽回しようとすればするほど、何かしら失敗してしまうか救いがない。
どうすれば私も麻美のようにしっかりとした人間になれるんだろう。でもきっと私はあんな風に自分の指針をしっかりと定めて突き進むことは到底できっこない。

だったら今は自分のできることをやっていくことに専念しよう。
私は足早に階段を下りた。

雛原詩織視点（1）（後書き）

現時点でダメなところがあればご指摘ください。

雛原詩織視点（2）

ダイニングルームのテーブルに、ハムエッグに味噌汁、納豆と漬物といった一般家庭な朝の献立を並べる。
素朴な料理の方が男の子はぐっとくるわよと、母に言われて私も作ったのだが、今さながら母に一言物申したい。あの、全部あんたのことは分かっているわよっていう態度が気に入らないし、あの人の言い方はいちいち古臭いのもどうかなって思ってしまう。
まだ寝ぼけ眼な黒葛くんは椅子に座ると、そのまま薄型テレビの電源を入れる。家の中に朝のニュース番組の音が流れるが、正直ありがたかった。
もしも黒葛くんがテレビを観てくれなかったら、確実にこの場に沈黙がずっと続いていた。そんなたいたたまれない空間に居続けなければならないことを考慮すれば、今の状況が最善だといってもいい。
それは頭では理解できている。それでも私は考えなくてもいい余計なことを考えてしまう。
黒葛くんは私とそんなに話したくないのかな、って。
「ご飯はどのくらいつぎましょうか？」
「普通」
私ははい、と答えて、炊飯器から玄米と白米が一対一で混ざったご飯を私と黒葛くんの二人分よそぐ。
男が食べるご飯の普通量と女の普通量ではかなり相違があり、慣れるのに時間が掛かった。だけど今では黒葛くんや、黒葛くんのおじさんがどのぐらいの量をつげばいいのかようやく丁度いい量を定めることができるようになった。
こうして彼と暮らすようになってそれほど時間は経っていないが、こうして少しずつ距離を詰めていければいいと思う。

「どうぞ」
「……ん」
黒葛は頬杖をつきながら片手でお椀を受け取る。視線はテレビに釘付けで、私を見ようとする気が全くないように感じられる。
ここまで露骨に避けられると返って清々しい。私は彼と向かいの席に座わる。
そして手を合わせる。
「いただきます」
「……いただきます」
挨拶や最低限のことはこうやって喋ってくれるが、それ以外のことは一切不要で、私と話すこと自体が損だと考えているかのように黒葛くんは私と関わることに積極的ではない。それは今までの彼のアクションを思い返していけば分かりきったことだ。
黒葛くんが味噌汁に手をつけると眉を顰めた。
良かったと、私は内心安堵し、心の中でガッツポーズをとる。
あれは唯一私一人だけで作ったなめこ汁だ。母親に手解きを受けながら料理したのだが、これだけは私の自信作だった。だからこそ黒葛くんが気に入ってくれるか懸念していた。それがこうも露骨に反応してくれると作り甲斐があったというものだ。
黒葛くんが眉を顰めるのは、頬が緩む衝動を必死で抑えている証だということをこの前黒葛のおじさんに教えてもらった。それを聞くまで私は黒葛くんが眉を顰める度にビクビクしていた。だけど、この様子だと気に入って貰えたようだ。
その後、黒葛はこっちに全く視線を合わせないまま、ご飯とみそ汁を一杯ずつおかわりした。
私は喜んでよそぎながら普段は意識しない『早起きは三文の徳』という言葉を思い出だすと、思わず顔がにやけてしまう。
「親父と、雛原のおばさんはどうしたんだ？」
黒葛くんはハムエッグを咀嚼しながらちらりとこちらを一瞥する。
「お母さんと黒葛のおじさんは朝早くから仕事に出かけました。も

しかして何か用事でもあったんですか？」
「別になにもない」
それだけ言うとまた黒葛くんはまた無言を徹底して貫いた。
私はそれから必死で学校の話題や、テレビの星座占いのなど、黒葛くんと私が話せそうな話題を振ったのだが黒葛は全く食いつくことはなかった。
「ご馳走様」
黒葛くんは食べ終わった自分の皿を流し台に持っていき、水につけ始めた。
私は目を丸くした。
彼が珍しく皿洗いをすることに驚いたのではなく、自分は朝食の半分も手を付けていない時間で、彼が食べ終わっていることに驚いた。ほとんど私しか話していないとはいえ、いくなんでも早すぎる。
急いで私が他のおかずに箸をつけていると黒葛くんは自分の分の皿をさっさと洗い終え、鞄を肩にかけていた。
「先に行く」
「ちょ、ちょっと待ってください！」
私はまだ手づかずのおかずは放っておき、箸を置くと椅子から立ち上がる。
そして、台所に置いてあった包みを取り出す。
赤い包みの方が私の分で、青い包みの方が黒葛くんの分だ。夏なら保冷剤などが必要となってくるだろうけれど、今の季節ならこのぐらいの包みで十分だ。
「あの、これお弁当です。迷惑かなっ……とも思ったんですけど、クラスで黒葛くんを見てるとお昼はいつも購買のパンばかりだったので、つい。やっぱりいつもパンばかりだと味気ないかなって思ったんですけど。あの、ちゃんと栄養も考えています。それで、あとですね、これ――」
「いい」
「はい？」

確かに彼の声で私の鼓膜は震えたはずだが、直ぐに頭に入ってこなかった。
朝食を作るだけならあそこまで早起きに固執しなくてもよかったはずだ。だけど私が携帯を使ってまで早起きした理由。それはただ、彼のためを想って弁当を作ろうとしただけ。たったのそれだけのことだったけれども、私にとっては大切なことだったんだ。
それなのにいくらなんでもそんな素っ気ない言葉、一言で私の行為を無下に断るのは私に対してあまりに酷であるとはいえないのだろうか。
だけどもこの感情はお門違いだ。勝手にお弁当を作ってはしゃいでいたのは他ならぬ私なのだ。
「いらない」
「そ、そうですよね。すいません」
一分の隙もない、突き放したような黒葛くんの言い方に意気消沈する。やっぱり、いきなりお弁当とか気味が悪かったのかな。重かったのかな。
でも、私ってあんまり人に誇れるところがない。
そんな私が頑張れるのは料理だけだ。私が黒葛くんにできることはそれぐらいしか思いつかない。それが否定されたら私はこれから何をしていけばいいのか分からない。もう、私は何もするなってことなのかな。
そんなの、嫌だ。
黒葛くんはご飯をおかわりするぐらい、私の料理を食べてくれたから口に合わないわけじゃない。だったら受け取ってくれてもいいと思う。それができないってこと、つまりそれは――
「あの……や、やっぱり、」
「いらない」
私のことが嫌いだってことだ。
一度も振り向かないまま黒葛くんは家を出ていく。
これで、家には私一人きりだ。テレビを消してしまうとどうしよう

もなく空しくなるような沈黙がこの場を支配する。
分かっているつもりではいた。けれど私と黒葛くんと間を隔てている溝がこんなにも深いとは思わなかった。
どうやったって昔のように仲良しこよしというわけにはいかないみたいだ。どうしてこんなことになってしまったのか過去を振り返ってみると、それはそれで仕方のないことだと納得するしかない。
「はー、やっぱり駄目だったかあ」
独り言を聞く人間はいない。私は存分に独りごちる。
この家に来てからは少しでも距離を詰めようと自分なりに努力しているつもりだったのだが、中々実は結ばない。
「私達、幼馴染なのにな……」
子どもの頃は辛いこともたくさんあった。だけど、こうやって瞼を閉じて思い出すのは黒葛くんとの思い出だけだ。
だけど、久しぶりに会った君は、私の思い出の中の君と全然違っていた。

黒葛陸視点（1）

†

俺と詩織は家族ぐるみの付き合いだった。
お互いの親同士が大学時代の同級生だったらしく、久しぶりに会って意気投合したらしい。
結婚生活においての愚痴や子育ての大変さだけでなく、大学時代の思い出を語れる。そして、住んでいる場所が目と鼻の先だから気兼ねなくいつでも話せる。となれば親しくならない方がおかしい。
そんなぐあいで両親が仲良ければ自然と子ども同士も仲良くなっていくのも必然で、俺達は物心ついた時からいつも一緒にいた。
小さい頃はそんな何気なくも幸せな日常がずっと続くと信じていた。誰だって子どもの頃はそうだ。成長すればするほど言葉にすれば恥ずかしい、『永遠』という儚く脆いものを真摯に受け止めて疑うことを知らない。
だけど、俺達の別れの日は突然きてしまった。
詩織の父親の仕事の関係上、詩織はこの地に居続けることはできなくなってしまった。単身赴任するには父親の家事能力は壊滅的であったらしく、どう足掻いても家族全員で引っ越さなければならなかったらしい。それだけ家族仲良いといってもいいだろう。
だけど俺の家の両親、特に母親は詩織の家族が遠くへ行ってしまうことに涙ぐむぐらい悲しがっていた。
それでも俺はそれ以上に辛かったと思う。
人前で泣きはしなかったが、枕に顔を押し付けて泣き叫んでいた。今考えるとあれだけ声が大きかったのだから部屋の外に声が漏れていたのかも知れない。それでも両親は俺に何も言ってこなかった。
それは素直に感謝しなければいけないことだが、今さになって感

謝を示したとしてもそんな昔のこと両親は覚えていないだろう。それに片方の親にはもう会うこともできない。だったらこの気持ちは俺の胸にそっとしまっておくことにする。

あの時の俺はこのまま何もせずに別れるのだけは嫌だった。

もしも、このまま何もせずに離れ離れになってしまったら、それこそ俺達の関係は最後であるということを子どもながらに敏感に感じ取っていたのかも知れない。

だから俺達二人は約束をした。

俺の記憶が確かなら言い出したのは詩織の方だった。

「ねぇ、りっくん。私のこと好き？」

今は詩織から他人行儀でよそよそしく黒葛くんと呼ばれているが、当時は名前の陸からとったのか、あだ名でりっくんと呼ばれていた。

それに今頃になってりっくんと呼ばれたとしても恥ずかしくて返事もまともにできないだろうから黒葛くんと呼ばれることには異存はない。

「うん、好きだよ」

好きだという言葉をおくびにも出さないで言える年齢だった。好意がある人間に率直に真意を告げるのは今の俺にとっては困難なことになってしまった。

「じゃあさ、結婚式やろうよ」

「結婚式？」

結婚式という単語が幼かった詩織の口から出てくることは完全に俺の思考の外にあった。

流石に俺はその時狼狽していた。

将来俺が誰かと結婚をするにしても遥か遠い未来のことだと高を括っていた。それをまさかこんな小さい時に経験するなんて思ってもいなかった。

「そう！　私とりっくん二人の結婚式」

反対の意思はなかった。

今思い出せば恥ずかしくて、身体中がこそばゆくなるような子ど

ものくだらないごっこ遊びだが、あの時の俺達は真剣そのものだった。

擬似的な結婚式を挙げることができれば、俺達の心はいつまでも繋がっていられると微塵も疑っていなかった。二人が物理的にどんなに離れていても、上空を仰げば、青い空が世界中どこにだって繋がっているように、きっと。

だけどそれは子どもの特権であり、くだらないもの。だけど、だからこそこうして思い出してみると輝かしいものだ。

黒葛陸視点（2）

結婚式会場は近所の公園でひと気のない時を狙った。
あの時は確か夏の頃だったと思う。
蝉を捕まえては詩織に見せていって、その都度怖がって逃げる詩織の後姿を追いかけるのが楽しかった。
バッタが跳ぶ姿を見て興奮して作業そっちのけになってしまいそうになったのだが詩織に睨まれて捕獲するのを断念したりもした。
虫の誘惑を断ち切り、俺はそこら中に大量に生えてあるシロツメクサで簡単な花飾りを制作し、詩織の頭にかけてやった。
結婚式に花嫁が頭にのせる髪飾りの代用品としては少し心許無いかもしれないが、あいつは非常に喜んでくれた。
「ねぇねぇ、今の私って綺麗に見える？」
「ああ、綺麗だよ」
無理にはしゃいでいる姿が痛々しく、俺はそれに精一杯気づかない振りをして一緒に和気藹々としていた。
この儀式が終わってしまったら本当に全てが終わってしまう気がしていたけれど、そんな考えは頭の隅においてやらなければならない。少しでも頭によぎってしまえば白けてしまう。悲しくなってしまう。
それに、結婚といえば大人がすることで、それをやれば俺達だって大人に近づけることができる。それがなんだが誇らしかった。今思えば滑稽以外のなにものでもないが。
「あなたはよき時もあしき時も、とめる時もやめる時も、えっーと。と、とにかく二人とも愛し続けることを誓いますか？」
滅茶苦茶な神父様の口上だったが、詩織の一生懸命さは充分伝わってきたし心が揺り動かされた。
詩織は餅のように丸く白い頬を赤く染めながら瞳を閉じる。それは俺が誓いの言葉を返答することを信じて疑わない、迷いの見られ

ない行動だった。
だけど俺は、詩織が言った『愛し続ける』という言葉だけがどうも気になった。気に入らないというわけじゃないが、どうしても引っかかってしまった。
人を愛すって、一体全体どういう意味なんだろう。
詩織と誓いを交わそうとする前に俺はそんなこと考えたことなんてなかった。
好きだという言葉の意味は理解できるけれど、愛すという言葉と何がどう違うんだろう。同じ意味な筈なのに何かが違う。
そんな簡単に人を愛すなんて口に出していいのだろうか。俺達子どもが軽々しく言ってはいけないような、俺達が考えているよりももっとずっと重い言葉なんじゃないだろうか。
俺はこのまま素直に返答してしまっていいのかどうか分からなくなってしまった。
やる前は自分の行動に意義があると自信があった。だけどこんな土壇場になって俺という人間はぐだぐだと考えてしまっていた。
俺はもしかしたらあの時、生まれて初めてあんなに悩んだのかも知れない。
ふと、気が付くと詩織は閉じていた瞼を開けていた。
そして詩織の大きな瞳には不安の色が宿っていた。その瞳からはもう少しで透明な滴が零れそうだった。
「んっ、んん」
それでも彼女は必死にそれを抑えていた。唇を強く噛み締めながら目を眇めていた。
俺の前では絶対に泣かないという断固たる決意に満ちたその顔を見て俺は決心した。
これからのことを子どもなりに覚悟した。
たとえどれだけ離れていても、どれだけの月日を経た先にどんな困難があったとしても、それを乗り越えていく覚悟。
それがあるかどうか。

俺は口を歪め、その時の自分自身の答えを出した。
「誓います」
彼女は泣き出しそうだったことをすっかり忘れたように天使のような笑みを浮かべる。
その時俺は勝手に誓ったんだ。
俺は絶対に彼女を泣かすようなことは絶対しないということを。
それは今でも俺の心にしっかりと刻まれている。
あいつの泣き顔を見るぐらいだったら俺は――。

†

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4147z/

アイス

2011年12月20日13時52分発行